
手を伸ばせば届きそうな短編集

親薬緩葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手を伸ばせば届きそうな短編集

【Nコード】

N1148BA

【作者名】

親薬緩葉

【あらすじ】

“手を伸ばせば届きそう”というのは
その辺りにころん、と落ちていそうなものという意味です。
ジャンルは特に固定せず書きますが、
恋愛・友情・日常これがよく書くものだと思います。

1.

私に、水をください
このままでは枯れてしまいます
どうかどうかお水を

「あ、雨」

鼻の先に冷たい雫を感じた瞬間
空から大量の雨
傘なんて持っていないのに
なんてバッドタイミング
大きなため息が出る

「なんなんじゃー」

一人ということもあり小声で呟きながら
足元の石ころを蹴る
あんまり飛ばなかった

「こんなんじゃ、潤わないっての」

私の人生、こんな雨じゃ潤わない

どうかどうか神様

私に？愛？という名の？水？をください・・・

馬鹿げた考え事をしながら
今日も誰もいない家へ歩くのだ

*r a i n y
d a y

2.

「なあなあ」

いつものメンバーで
いつものファーストフード店にたまって
話していたときのこと

「花火打ち上げようぜ」

私の隣の席に座っていた男子が
目を少年のように
輝かせて言った

口の中に流れ込んできたシェイクが
喉に冷たい感覚を残して
落ちていった

その日

私たちはとりあえず
打ち上げ花火のたくさん入った花火セットを
買って買って買った

近くの川原に集まったころには
もう空は真っ暗で
ほしがちらほらと見えていた

不思議と胸は高鳴っていて

自然に笑顔が溢れてた

「よし、やるぞ」

そういつて言いだしっぺの男子は
ポケットから取り出したライターで
ろうそくに火をつけた

「まずは、手持ちのやつからどんどんやったるぞー」

「おー」

メンバー全員

グッと握った手を

高々とあげた

シュワァァァ

パチパチパチッ

手持ち花火特有の音と煙と光が

私たちを包む

こんなことをしたのは本当に久しぶりで
あまりの眩しさに驚いた

一面が光輝いて

煙くて

友の声もちゃんと聞こえなかったけど
楽しかった

「はいっ手持ち終了」

始まってからあまり時間はたっていないかった
あっという間だった

「では、お待ちかねの打ち上げいきますかあ」

この掛け声をきっかけに
盛り上げは最高潮に達していた

きゃーきゃー言いながら
打ち上げ花火に
火をつける

小さな火の光が
導火線を伝って
そして、花火の下に消えた

その瞬間

シュバツ

ヒュー

バン
ツ

夜空に

小さい星が増えた

周りからは

わけも無く歓声が響く

もう、何をしていても楽しい

「うっしやーまだまだいくぜえっ」

「おおー」

今日は長い一日になりそうだ

＊ファイヤー・ホリデイナイト

3.

会いたい

その言葉が

今の私の全て

「今日はクリスマスだよ」

「知ってるよ」

電話越しの声は優しいけど
私は少し怒り気味

「恋人のお休みのためにあるの」

「それはどうかなあ」

あはは、なんておどけて
まるめこんでしまうんだ

今日はクリスマス

恋人とのお休みの日

私は恋人である電話越しの遠い彼に
会える予定だったのだ
でも、お仕事なんだってさ

「会いたい」

「俺だって、飛んで行きたいよ」

じゃあ飛びなさいよ

そう言ってやりたかった

「あ、そろそろ始まる」

「もう知らないっ」

「ごめんね」

声からして反省の色だけがにじみ出ている

私は、何も言わないまま電話を切った

ツーツー

その効果音は

今の私には

あまりにもむなしすぎた

「うっうわあああん」

半分叫んで泣いた

目の前のテーブルには

昨日の夜から仕込んだ

いつもより100倍凝ったご飯と

中央には、これも手作りのブッシュ・ド・ノエル
ホワイトチョコの板には

？メリークリスマス 大好き？

＊クリスマスのある恋人たち

4.

これは、ずっと昔のこと

私がまだスクールバッグを肩にかけて

周りに何も無い田舎道を

毎日友達とお喋りをしながら歩いていたころ

「このカバン、重すぎて肩が外れるよ」

なんて、よく言ってたっけ

私は青春という名の時期を

ゆっくりと過ごしていた

「おはよう」

教室に着くと

キミが私に笑顔でそう言った

その瞬間、さっきまであれほど重かったカバンが
急に軽くなった。

頭も身体も、宙に浮いているみたい

だけど、そんな時間は長くは続かない

あっという間にパチンと弾けた

カバンは重いし

頭も身体も、

重力の思うがままになってしまった

「おはよう」

それを感じたあと

やっと、キミに言葉を返す

うまく笑えているだろうか

声は裏返っていないだろうか

頭をよぎる自分への問い

今は振り切るしかない

今日は、と決意したのだ

今日こそ、自分から話しかけようと

それはずっとずっと前から決めていた

今日は、キミの誕生日だから

おめでとうって言いたかった

それだけでいいんだ

私は心を整えた

自分の席へつこうとしていたキミに

声をかけようとする

「あっあ「そういえばさ」」

男子がキミの周りに集まった

やっぱり、キミは人気者

「彼女、できたんだって？」

え？

頭の中で

ビー玉みないな何かが

カランと音を立てた
なに、これ

「あんまり大きな声でいうなよ」

否定しないキミ

ビー玉みたいな何かが

もうひとつ

カランって言った

「誕生日プレゼントもらった？」

カラン、カラン

「まあね」

カラン、カラン、カラン

キミが、笑っている

私に言葉をくれた時の笑顔じゃなくて
顔が赤くて

はにかんでるみたい

カラン、カラン、カラン、カラン

「あれ、どうしたの？」

キミが、私に問いかける

「具合が悪そうだよ」

私は、今どんな顔をしているんだろう
青ざめて

暗く重い顔をしているのだろうか

「そうみたい、保健室行ってくる」

自然と、言葉は出た

私は走りだした

カラン、カラン

頭が痛い

足が止まらない

一体どこまで

走らなきゃいけないんだろう

このビー玉はなんなんだろう

＊頭のビー玉

5.

夏

暑い夏

それは、一年で最も勉強に身が入らない季節であり
一番遊びたくなる季節
のはず

だけど、私は

いっぱいに開けた小さな窓と

古いながら必死に羽を回す扇風機のある

小さな空間で

一人勉強に励んでいた

なぜって聞いた？

答えは簡単

好きだから

特に数学が好き

複雑な数式を一つ一つ解いていって

最終的な答えにたどり着いた時なんて

快感以外の何物でもない

でも、周りの人は

難しいってすぐ投げ出す

私には一生かかっても理解できない考え

でも、

「あれ、答え違う」

こんな時は投げ出したくもなる
必死で解いて導き出した答えが
真実と違うなんて
なんだか、考えが行き詰る

「なんでよー」

額から頬につたう汗を手でふき取り
机の端に置いてある
お気に入りのコップから
麦茶を飲む
ゴクリ
音がなった

さて、続きだ
なんで答えが違うのか
一回頭を真っ白にして
最初からとりかかる

本当の答えを見つけるために

私の夏は
まだ始まったばかり

＊数式少女

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1148ba/>

手を伸ばせば届きそうな短編集

2012年1月4日09時49分発行